

## 佐藤孝治氏を憶う

鈴木政吉

大八洲入植五十周年を迎えるに当たり石田組合長が私のところを訪れ、故佐藤組合長と公私ともに交流のあった君に思い出など感想を一筆お願いしたいと依頼を受けたが、もとより私に文筆の才能などある筈がなく、私の任ではないことを充分承知の上で思案の末お受けした。



昭和40年3月31日 水上温泉にて  
(左)鈴木政吉氏 (右)佐藤孝治氏

私と大八洲開拓の皆さんとの出会いは昭和三十五年頃、共同生活から個人住宅を建築して、未だ内装工事などは未完成の住宅に移住して間もない頃であった。時折組合員の皆さんと茶碗酒を飲みながら語った苦労話の時、ここに入植した当時は主食がさつま芋で胸焼けがして困ったので、さつま芋を輪切

りにして天日に干して食べれば少しは胸焼けが防げると思い、干して置いたら、烏に食われて昼食抜きの日があったよと東北訛で話したことが今でも印象に残っている。

その頃は佐藤組合長と直接面談する機会がなかったが、組合員や組合職員の人達と交流を深めて二年余り過ぎた頃、佐藤組合長が菅生沼土地改良区の理事長に就任して二カ月ぐら以後の昭和三十七年の秋に私も土地改良区の職員として就職したのが出会いである。当時の土地改良区は公庫借入金償還金滞納による事業の停滞、賦課金の滞納整理、干害応急対策事業、用水障害事業等難問山積の時期で、これらの諸問題を解決し軌道に乗せるには想像を絶する激務で、少ない職員も定着せず、理事長自身関係機関を走り回り事業促進に連日多忙を極めておられた。

しかし、事務所で来客に対応する時の理事長は、乗馬ズボンにジャンパーを着てゴム長靴を履き、火鉢の灰を掻き均しながら飾り気のない東北弁で対談し、時には肩を揺すって愛想のいい笑いをしている姿は、連日の不安や苦労など少しも

感じない普通の人の好い親爺であった。

そんなある日、理事長が私に、俺は今日まで各方面の役人にお世話になり付き合ひもしていただき、只の一度も文句や苦情など言ったことはなかったが、旧利根水田客土工事にもなう補助金削減問題で境土地改良事務所の所長に強く抗議し、代償に別途事業の採択を要望したと珍しく声をあらげて話してくれた。この時の要望が後の大八洲開拓流作地区の宅地高上げ工事に絡む水田整地工事につながっていったのである。後に境土地改良事務所の関係者は人は外見で評価するととんでもない失敗をすると話していた。

賦課金の徴収率は昭和三十三年以来相変わらず低く、事業停滞の原因となっていることは歴代の各理事長は当然承知していたが、滞納整理には至らなかった。佐藤理事長は、円滑な改良事業推進のためには事務的にも相当激務であることは予想されるけれど避けて通るわけには行かないと賦課金滞納整理を決断し、茨城県債権整理協会に依頼して目的を達成した。これを機会に賦課金の徴収方法を改正し事業の促進をはかった。斯くして土地改良事業は年次進捗し、菅生沼土地改

良区の信頼も回復して、後任の各理事長の努力により昭和四十一年代行開墾建設事業並びに県営付帯事業等計画された全ての事業が完成した。その後佐藤さんは茨城県開拓連会長に就任して菅生沼土地改良区とも離れたが、改良区には変わらぬ支援と常に前向きに後任理事長の相談相手として貢献され、新規土地改良事業として県営圃場整備事業を立案して関係当局に強く要請し、これが採択されて各集落の説明会を開くまでに至ったが、米の生産調整対策にもなう減反問題が端を発しやむなく中断を余儀なくされた。

しかし、常に将来に目を向け、私利私欲を捨て、何事も弱者の立場に立って汗を流してくれた佐藤さんに心から尊敬の念を抱いているのは私ばかりでないと思う。その佐藤さんが七十二歳を最後に故人となられ、開拓五十周年をお迎えできないことは誠に残念であるが、次代の歴代組合長並びに組合員の努力の賜が今回めでたく入植五十周年を迎えることができたと心からご祝福申し上げると共に今後の大八洲開拓農業協同組合の御発展を御祈念申し上げ、懐かしい佐藤さんの回顧のことばとします。

## 五 佐藤孝治初代組合長の胸像建立（昭和五十四年）

このことについては組合員の間で開拓三十周年頃から取り

沙汰されていたので、有志数名が発起人となって具体化を進